この3枚の絵の不思議なところをさがしてみよう。

上《昼と夜》1938年 板目木版2色刷
下《爬虫類》1943年 リトグラフ
右《もう一つの世界》1947年 木口木版・板目木版
3色刷

【上の絵】鳥はどちらに向かっているかな？
黒い鳥は左の方へ、白い鳥は右の方へ向かっているね。あらあら不思議！ 畑がいつの間にか鳥になったり、左は昼間なのに右は夜になっている。

【下の絵】とかげはいつの間にかスケッチ帳のなかから飛びだし、本の上によじぼって、行進をしてまた紙のなかに戻っているね。

【右の絵】立体はいったいどちらが上だろう？ 上のふたつの窓からは地面が見えているね。真ん中のふたつは目の高さで、地平線がみえる。そして下のふたつの窓からは星を見上げることになるね。

エッシャー展ジュニア・ガイド
使用作品所蔵先：ハウステンボス美術館
All M.C.Escher works©Escher Holding B.V.-Baarn-the Netherlands
協力：明治大学 杉原厚吉研究室　　編集・発行：そごう美術館　2016年9月

ジュニア・ガイド

もっと知りたいエッシャーの不思議世界

エッシャーってどんな人？

これはどちらも自画像。球体の中でこちらをじっと見ているのもエッシャーだよ。
手に球体を持って自分の姿を映したらほんとうにこんな風に見えるのかな？

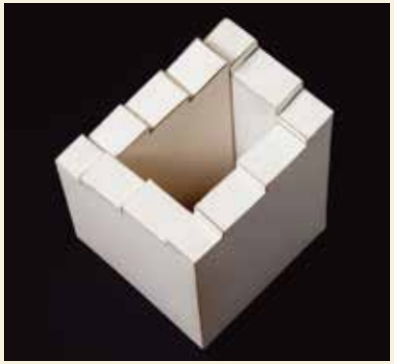
左《自画像》1943年 スクラッチドローイング
右《写像球体を持つ手》1935年 リトグラフ

1898年オランダで生まれ1972年に亡くなったエッシャーは、20世紀に活躍した画家（版画家）。「だまし絵」と呼ばれる、じっさいにはありえない三次元の世界を二次元の版画に表現した画家として有名です。
まだコンピュータもない時代の、一見本当の世界だと錯覚させるような精密な描写は今みても驚くばかりで、人間の視覚を自由にあやつる「視覚の魔術師」とも呼ばれるようになりました。

ハウステンボス コレクション
エッシャー展 視覚の魔術師
2016年9月11日（日）～10月10日（月・祝）
そごう美術館［ 横浜駅東口 そごう横浜店6階 ］
〒220-8510　横浜市西区高島2-18-1　電話045（465）5515〈美術館直通〉
http://www.sogo-seibu.jp/common/museum/
SOGO 横浜
電話045(465)2111 大代表
www.sogo-gogo.com

エッシャーのあり得ない建物を体験しよう！

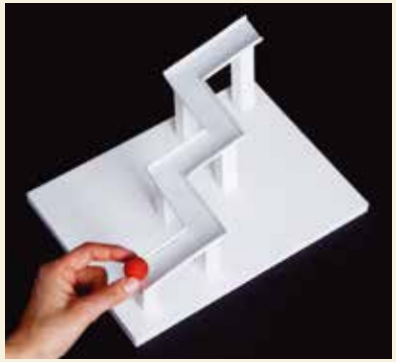
エッシャーの「だまし絵」に描かれている立体は絵に描くことはできるけど、じっさいには作れないと長い間考えられていました。でも、その中には作れるものがあることを工学博士の杉原厚吉先生は気づきました。それは、ある特別な一点から見るとだまし絵が立体となっているのですが、他の視点から見ると、よくわからないへんな形をした立体なのです。
そんな立体に興味を持ったら自分で作ってみよう！



◆どこまでも続く階段……

内側が空洞になっている建物の屋上にぐるりとめぐる階段があるのが見えるね。
その階段を上がる人たちはずっと上り続けている。また反対向きの人たちはずっと下り続けているね。無限に続くこんな階段が本当にあるのかな？へんな立体でこの階段を作ったのが「無限階段」です。

上《上昇と下降》1960年 リトグラフ／杉原厚吉「無限階段」
右ページ上《滝》1961年 リトグラフ／杉原厚吉「反重力ジグザグすべり台」
右ページ下《ベルベデーレ（物見の塔）》1958年 リトグラフ／杉原厚吉「冗談の好きな二本柱」



◆低いところから高いところに流れる水……

落下する水が水車を動かして、2つの塔の間の水路を通って流れ、ふたたび滝が落ちる場所に戻っていく。2つの塔は同じ高さみたいだけど、右側の塔は左側より1階分低くなっているね。とすると、水は低いところから高いところに流れているみたい。
「反重力ジグザグすべり台」もなぜか一番低くみえる手前の端に玉を置くと、玉はこの斜面をのぼるように奥に向かってころがっていきます。

◆たてと横がねじれてる……

建物の下の床にははしごが立ててあり、そこをふたりの人がのぼっていくね。でも不思議！建物の内側からのぼったはずなのに、一階上に着いてみるとなぜか建物の外側にいることになる。「冗談の好きな二本柱」も、そんなふつうではありえない空間のねじれを立体化しています。